

指導教諭 K.M

『学内留学』は、平成24年度、年間3回、教育学、経営学、法学の3講座でスタートを切り、受講生は48名だった。25年度、年間4回実施へ、受講生は52名、25年度、心理学を加え4講座となったが、受講生は46名と微減。平成27年度には天文学、環境学を加え6講座となり受講生も一気に129名と激増。28年度168名、そして平成29年度178名と北野を代表する土曜講座となった。

この企画が生徒の強い支持を得ているのは、指導をお願いしている5名の先生方の教育力の高さだと思う。教科指導力は言うまでもなく、生徒への愛情と我慢強さを持ち、生徒が理解できない時には、必要に応じて簡単な英語表現への言い換え、ボディランゲージ、ジェスチャー、視覚教材など利用できるものは何でも利用されている。そもそも、平成22年11月に、当時の橋下知事と韓国（ソウル市）の教育現場を見る機会を得、日本の英語教育の大きな遅れを感じた。ゆえに今の北野の英語教育はその多くを大元（テウォン）外国語高校にヒントを得ている。具体的にはリーディング・ライティング・リスニング・スピーキングの四技能についての授業の他、文学の講義・エッセイライティング、プレゼンテーション、ディベートの講義が行われていたことである。「韓国人は知識はあるが表現方法を知らないと良く言われるので、2～3年前からディベートのクラスも始めた。」と同校校長が話された。

ディベートの授業を見せてもらう。各教室に全て電子黒板が備え付けてある。ソウル教育庁から「ソウルの学校で体罰を禁じる (Corporal punishment was banned in Seoul schools.)」という通達が出た直後だったらしく、それに関する記事を読んだあと是非を論じるという内容。クラスは男子4名女子16名の計20名。教員はネイティブが一人で担当。生徒が次々と手を上げ意見を述べて行く。内容のあることをかなりのスピードで喋って行く。使用語彙のレベルも高い。教員のまとめ方、引き取り方もうまい。生徒たちは教員に対してかなり同情的で、「体罰を禁止すると、教員の権威がなくなる、尊敬されなくなる」との声もあったが「体罰すれば尊敬されるのか」との意見も出る。同校の英語教員は海外で教育を受けた二十代、三十代の若い教員が多い。留学経験のある教員は8割から9割に上る。全部で20名おり、ソウル科学高校と同様、厳しい教員評価（年二回、生徒と保護者と同僚が行う）に教員はさらされる。それでも両校で教えたがる教員は引きも切らないとのことだった。

大元外国語学校に優るとも劣らない北野高のすべての教職員のおかげで、immersion lessonも6年目を終えることができた。日常の授業準備、さまざまな校務に加え、クラブ指導、海外研修の企画、引率等で多忙な日々の中、英語関連行事が土曜日に行われることの配慮と、協力をさせていただいたことに心から感謝したい。



教育学



ビジネス学



心理学



天文学



環境学



多目的ホールでの代表発表(1)



多目的ホールでの代表発表(2)[講師団]



多目的ホールでの代表発表(3)



多目的ホールでの代表発表(4)

A講座 Education Course (教育学講座) by Mr.Peter Vande Veire

1年3組12番 K.G

私は決して英語が得意ではない。今まで同級生の語彙力の高さと、高度な英語構文を使いこなす姿に圧倒されてきた。私は自分の英語力の無さをひとつのコンプレックスのように思っていた。しかし私は、教育学に関する最終プレゼンが優秀だったとして賞された。これは非常に意外であったが大変うれしかった。この学内留学の経験は、私に自信を与えてくれた。

学内留学の受講を決めた動機は、そのコンプレックスを少しでも解消するためであった。この学内留学の特に面白いところは、英語が片手間に学べることである。英語を勉強するという感覚で受講していた気がしない。私は教育学専攻だったので、専門的な教育学の講義がいかに面白かったことか。講義を英語で進めているだけのことであって、英語など意識下にあった。ただ、担当の先生がゆっくり英語で話していただいたことで、わかりやすかっただけかもしれないが。

だがおそらくこの「意識下」というのは、非常に重要なポイントなのだと思う。ネイティブは英語を話しながら文法表現等を気にしない。すなわち、講義中の私たちは他の英語の勉強の最中よりもネイティブに近づいた状態であり、質の高い英語の勉強になっていたはずだ。

最終プレゼンの制作・発表は、講義とは対照の「英語のアウトプット」だった。わたしはこれまでに学んだことを無駄にすることはイヤだったので、熱心に取り組んだ。もちろん発表の原稿も完全暗記した。何回もリハーサルをした。本番でも自分をさらけ出すように「伝える」(=アウトプット)を意識した。発表後この努力が認められたかのように、ハナニラバッジを授けられて、とても感激した。

だがまだ伝え切れなかった内容があり、そこは自分の伸びしろなのだろう。これからも私は主体的に、英語が「意識下」にあり、「伝わる」ものになるように学び続けたい。

B講座 Business Course (ビジネス学講座) by Mr. Lance Domotor

1年7組16番 S.S

計四回にわたる学内留学を終えた今、学内留学ではとても有意義な時間を過ごすことができたと感じています。

まず、自分の興味のある講座を選択できるのが学内留学の長所の一つに挙げられます。私はもともと経済学部に興味があったことからビジネス学を選択しました。とは言っても、普段の生活の中で経済について深く考えたり、学んだりする機会はなかなかないので、この学内留学は私にとって経済について知るとても良い機会でした。

また、学内留学のための特別なクラスが編成されており、普段関わりのない人たちと関わったことはとても大きかったです。学習意欲のある人ばかりで、そのレベルの高さにただただ圧倒されました。授業の受け方はもちろん、休み時間の過ごし方から課題の取り組み方、英語に対する姿勢まで、たくさん刺激を受けることができ、日ごろの自分を見つめなおすきっかけになりました。

そして最も肝心の授業についてですが、ネイティブスピーカーの方のオールイングリッシュの授業はやはり決して容易くはありませんでした。講師や友人の英語を理解できなかつたり、伝えたいことをうまく英語にできないもどかしさを感じることもありましたが、それゆえ退屈する暇などなく、常に集中して授業を受けることが出来ました。今までで一番英語を身近に、楽しく感じられた時間だったと思います。また、授業内では各班で準備してきたプレゼン発表の時間があり、さらに私の班は大ホールでも発表させていただきました。とても緊張しましたが、聞き手に伝わりやすいように何度も原稿を推敲し練習を重ねたこと、そして何より、頼もしい班のメンバーがいたことが心強かったです。このプレゼン発表の経験は必ずこれからの糧になると確信しています。

今回の学内留学では、経済学を英語で学ぶことによって、英文法を学ばずとも英語力を養うことができました。

C講座 Psychology Course (心理学講座) by Craig Boobyer

1年9組35番 Y.K

第二言語としての英語は、私にとってどのようなものだったでしょうか。正直、暗号によって会話が成り立つような、不思議な感覚を楽しむためのものだった。実際、それが直接的に何かの役に立ったこともなく、その必要性を強く感じたこともなかった。今回の学内留学についても、なんとなく、英語を使う機会が欲しかったので受講を希望した。分野は、理系に進学する私には学ぶ機会がないであろう、心理学を選択した。大きな理由はなかった。

そして学内留学最初の授業。大切な部分を聞き逃したりしないか、少し不安だった。英語を聞いて理解するのは、あまり得意ではない。しかしこの日だけは、先生の口から発せられた、全ての英文を理解できた。英語の意味がするすると脳内に入っていく。私の能力のおかげだろうか。いや、あのと聞いた英語は、テストのリスニング問題のような、無表情な英文とは違った。人に説明するときの、わかってもらうための英語だった。どうやって話すと、こうも分かりやすくなるだろう。違いはなんだろう。気になった私は、先生の話すスピード、大きさ、手振りや視線などを注意深く見続けた。

心理学についても、興味深いことを教えてもらった。そして最終日、それら全ての知識を生かし、グループでひとつプレゼンを作り、発表する。私の持っている心理学の知識は、クラスの人全員が持っている。しかし、私にはそれを伝えるための技術がある。自分の発表のときは、正直緊張したが、そう思うことで心を落ち着かせた。強調したいところはゆっくりと言った。分かりづらいところは身振り手振りで説明し、聞いてほしいところは、相手の目を見て話した。この発表のために、自分のできることを全てをした。今まで先生が、そうしてくれたように。すると、相手も、私のことを真剣に見てくれた気がした。そのとき初めて、伝えること、知ってもらうことの楽しさを感じた。

第二言語としての英語は、私にとってどのようなものになるだろうか。ただの会話のためのツールか、それとも、閉ざされた門を開くための鍵か。今、少なくともわかっているのは、「心理学」や「プレゼンテーション」という門は開いたということ。その鍵は自分のためだけでなく、他人のためのもにもなりうるということ。そして、門をくぐったとき、今まで知りえなかった風景が、私を歓迎

してくれることだろう。

D講座 Astronomy Course (天文学講座) by Mr. Josh Glaser

1年9番12番 S.H

学校にいながら留学できる、完全英語のみの講座。なんて魅力的な授業だろう、と申込用紙を見た時からワクワクしていた。今回、全4回の学内留学、天文学コースを受けて学んだ多くのこと、得られた経験を忘れないうちに書いておこうと思う。

この学内留学天文学講座の一番の魅力は何といっても講義の面白さだった。天文学の講義とはどのようなものか、あなたは想像できるだろうか？この講座で私たちは"The Origin of the Solar System"—「太陽系の成り立ち」について学んだ。講義では、先生が専門用語を簡潔な英語に言い換えて説明して下さったので、難しい内容もよくわかった。先生の講義で学んだ後、更にグループワークで図として表し、同じテーマについて何度も復習した。一回目の講義だけではわからなかったことも、友だちと語りながら自分たちでもう一度形にすることで、きちんと理解できた。

また、この講座において、私は自分のプレゼン能力が伸びたと思う。全4回の内、プレゼン発表は計2回、テーマは「太陽系内の惑星以外の物体」(小惑星、彗星など)、「太陽系の各惑星」についてだった。準備は多忙を極めたが、全く知らないことを一から勉強するのも新鮮だったし、逆に自分が今までよく知っていると思っていた内容でも調べてみると新たな発見があってとても楽しかった。グループのメンバーとも準備の時間を経るうちに仲良くなることができた。

今まで人前で英語での発表はしたことがなかったので、本番のプレゼンは緊張したが、発表を終えた時はやり切った達成感があり、準備の時間が報われたようで嬉しかった。クラスでの発表後、私たちのグループはホールでも発表させて頂いた。クラスとは違う緊張感があったが、大人数の前でプレゼンができたことは自分の自信にもつながった。最後には講師の先生からコメントを頂き、今後の自分にとって大きな励みとなった。

学内留学を終えて、この学内留学は自分の可能性を広げてくれた思い出深いものとなった。これからもこの経験を忘れず、様々なことに積極的に挑戦していきたいと思う。

E講座 Environmental Science Course (環境学講座) by Mr. Noel Slattery

1年4組19番 K.K

私は学内留学と聞いて、授業を受ける前は、無意識のうちに、ネイティブの先生が英語で講義をなさって、生徒はそれを聞いて班ごとに英語で交流するものだと思っていた。しかし、私が受講した環境学では、環境について生徒が自分でプレゼンを作り、先生は生徒のプレゼンの改善点を教えてくれるという授業形式だった。私は、この授業形式のほうが、生徒も積極的に授業に参加しやすくよいと思う。さらに、この授業では、英語の語彙や環境学の知識だけでなく、見やすいパワーポイントの作り方や発表の仕方を学ぶことができた。これらのスキルは社会人になってからもさまざまな使い道があり価値の高いものだと思う。

私が学内留学で特に驚いたのは他の生徒の発表のレベルの高さだ。発表を通して私はさまざま環境問題を知ることができた。濃い内容の発表ができるのは、もちろん授業の前に班のメンバーと集まって互いに環境問題の情報を共有し、協力して時間をかけてパワーポイントにまとめ上げたからだ。学内留学の一週間ほど前から、パソコンが使えるLAN教室が昼休みや放課後に一年生でいっぱいになっているのを見てSGHとしての北野高校生の誇りのようなものを感じた。

私が学内留学で残念だったことは、授業が全部でたった四回しかなかったことだ。授業回数が増えると、次の授業までの間が短くなって、準備はより大変になるけれど、学内留学で学べることは、昼休みや放課後を返上する価値があると思う。

振り返ってみて、大変だったという思いよりもはるかに、もっとやりたかったと思っている自分がいた。これからの授業や、社会人になってから、優れたパワーポイント発表や英会話ができるように、学内留学で学んだことを生かして行こうと思う。